

小説同人誌評 39

ガザ地区への 侵攻が続く日々 に

細見和之

コロナ禍がようやく落ち着いてきたかと思えた矢先にロシアによるウクライナ侵攻がはじまり、今度はまた、パレスチナでの事態が急を告げている。一〇月七日に二千発から三千発のミサイルがガザ地区からイスラエルの南部に発射され、二百二〇人以上の「人質」が連れ去られた。それに対してイスラエルが「戦争」を宣言して報復の名のもとにガザ地区北部への空爆を続けて、さらに地上戦までが展開されている。いまは七日間の休戦状態をへて、イスラエルがふたたび軍事行動を再開させたところだ。イスラエルの攻撃はすでにガザ地区の南部にも向けられている。

瓦礫の山と化したガザ地区北部の映像を見ながら、ハマスの戦術が功を奏したとはとても思えない。とはいえ、何年にもわたってパレスチナ問題が置き去りにされていった状況のなかで、世界の目をパレスチナに向けたおさせるためにはあれほどの奇襲作戦が必要だ

ったのではないかと反問して瞑目するしかない気にもなる。そんなことをしなくても、と言えだけの根拠がとうてい私にないのだ。こういう状況でこそ「詩」は書かれ得るのだというのが私の持論だが、私たちに届くまでに時間がかかるにせよ、ウクライナで、ロシアで、ガザで、もちろん小説もまた書かれて

いることだろう。

さて、今回はとくにこの一冊という同人誌は見あたらなかったが、力作をいくつもの雑誌で読むことができた。

その筆頭は、『V I K I N G』第87号掲載の、夏川龍一郎「龍の舞う村」。雄太という子ども視点で、小さな山村における一九六〇年前後の生活を生きいきと描いた、四百字詰め換算で百枚弱の作品である（以下、分量については四百字詰め換算で、枚数のみを記す）。

冒頭、雄太は小学校の六年生。村の川の淵で若い女性が水死体で発見される。その淵には龍が棲んでいて、その龍を見て、見たことを口にした者は龍に殺されるとされているのだ。実際、雄太の中学一年の友だち、佐一の父は、龍を見たとき口にした翌日、伐採作業で大怪我をして死んでしまう。作中のひときわ魅力的な人物、半助も、雄太の弟、人志を鉄砲水から救った際、龍の極楽を見たとき叫んで流されてゆく…。

雄太が中学一年のときに村にやって来た芝

居小屋の美雪という女の子との出会いと別れなど、印象的な場面がいくつも展開されてゆく。

ここ一〇年近く『V I K I N G』を牽引してきた宇江敏勝の作品が、実体験とともにゆたかな民俗学的あるいは文化史的知見を背景に緻密な作品世界をタペストリーのように織り上げてきたのに対して、ここではむしろ限定的な子ども視点が生かされている。作者の新たな作品世界の展開に拍手したい。

同じく『V I K I N G』第87号掲載の、長谷川和正「サーカスの少年」も、同じような出会いと別れを五〇枚弱の作品ですっきりと描いている。

こちらは小学校四年の大介の視点で、神社の境内にやって来たサーカス小屋の、同じく小学校四年のシローの姿が捉えられている。大介はシローを早朝のカブトムシ捕りに誘って、親しくなつてゆく。ともに父親がおらず、共感するところがあるのだが、シローがじつは小学校に通えていず、その母親がサーカスとともに設置されている見世物小屋の「蛇女」役であったりして、小学校四年には立ち塞がっていた…。

さきに紹介した夏川作品の半分の分量で、遙かに端正に仕上げられているのは間違いがない。それを是とするか、夏川作品の荒々し

さに軍配をあげるか。

同号掲載の、内田謙二「生きる」も、七〇枚あまりのじつに味わい深い作品。

冒頭、パリの劇場（映画館）から三人の老人が吐き出される。長らくフランス暮らしをしている日本人の啓という人物、その友人のドイツ出身のオーピー、そしてノルマンディ出身のアンリである。啓とアンリは初対面で二人のあいだで当初はぎこちないやり取りが続く。親しくしようとする啓にアンリが一向に乗ってこないのだ。それが夕飯を食べながら次第に打ち解けてゆき、周囲の若者たちの賑わいに対抗するようにして、最後はノルマンディ民謡を三人で口ずさむまでにいたる。その様子が啓の視点で描かれている。

それぞれが異郷の地パリで、人生の辛酸をなめつくし、パトナーとも死別し、さながら人生の退役軍人のようにもなっている三人が意気軒昂としている姿が胸を打つ。

『革』第39号掲載の、清原ふみ子「桜たより」は、移りゆく被差別部落の光景に重ねて母と息子の越えようのない断絶を、百枚あまりの作品で描いている。

冒頭、区画整理によって一軒家からマンションに引越すで一〇年をへた主人公、シマエの姿が描かれる。そこから時間を遡ってゆく構成。まずマンションに引越す以前に、不意にやって来た息子、満男との再会の

場面、さらにその二〇年前、中学三年になった満男がシマエの前に現われた場面が振り返られる。

シマエは満男を産んで間もなく離婚し、三歳の満男を他家に養子にやっていた身だった。離婚した夫とはその後思わぬことに復縁したが、その時点では満男はすでに他家の子として育っていたのだった。養家はシマエの家よりも遙かに裕福だが、満男は自分が実の母親から見捨てられたという思いで養家に馴染めず、やがてヤクザまがいにぐれて行く。マンションに引越す以前の、一軒家に不意にやって来たときも、満男はすでに警察に追われている身で、翌朝には現に逮捕されてしまったのだ。

さらに、満男の妹にあや子がいて、彼女はシマエの知らないところで、満男に苦しめられていた。さんざんお金の援助などをした果てに、満男がとうとう警察に逮捕されたあと、あや子は婚家を出なければならなかったようなのだ。シマエの母親としての葛藤、満男の憤懣やるかたない思い、あや子を追いつめるかのような理不尽な事態……

最後に、あや子宛てに届いた、刑期を無事終えたと思われる満男とそのパトナーらしき百合子の連名による暑中見舞いのハガキが、微かな希望となっている。これはあや子の視点で書かれてもよい作品かもしれない。

『私人』第110号掲載の、梶原一義「二十万円」は、四〇枚あまりの作品で、よくまとまった警察ものとなっている。

六二歳の柴田啓輔のもとに警察から、逮捕中の犯人がお宅に泥棒に入ったと自供している、という連絡が入る。啓輔は妻の妙子と二人暮らしだが、妙子も泥棒など考えられないという。けれども警察官の滝川は二十万円が盗まれているはずだと言いつづける。啓輔はとりあえず被害届けを出す、これには裏があるはずだと感じる。

ここから作品は犯人の広瀬雄一の視線に転じ、実際に広瀬がもっと重い傷害窃盗事件のアリバイとして、柴田家での窃盗という虚偽を自供したことが明らかになる。同じ時間に別の窃盗をしていたのだから、自分はそちらの事件の犯人ではあり得ない、という理屈である。

さらに、滝川とともに柴田家を訪れていた女性刑事、山中香代の視点で、滝川が立身出世のために、同時期のさらに別の女子大生殺しの事件に集中しようとして、広瀬の柴田家への窃盗をわざと認めたことが暴かれる……

最後は、件の女子大生殺しの犯人も広瀬であったことが明かされるのだが、なぞそうでありそうな話のきびきびとした展開に感心させられた。

『雑記離子』第28号にも力作が並んでいる。

同誌掲載の、福井絢子「日はまた昇る」は、主人公「田代早紀江」の、不意にはじまった二週間の入院生活をたんと描いた七〇枚弱の作品。

七七歳の早紀江は深夜、自宅でめまいを覚えて倒れる。病院では小脳の梗塞という診断が出て、即入院となる。早紀江は、大脳の梗塞で言語障害に陥り、七年間闘病生活を送った父親の姿を自らに重ねる。個室から大部屋に変わらせられるときの不安。大部屋の各患者の姿。とくに、「足が痛い。足が痛い」と叫び続けている男性患者の「木下さん」、施設の仕事は不味いといひながらも施設に帰りがたがっている「佐藤さん」の姿が、心細い早紀江の心の鏡に鮮明に映し出されてゆく。地味ながら、こういう作品のかけがえのなさをあらためて感じた。ヘミングウェイの作品と同じになってしまっているタイトルは、再考が必要ではないか。

同誌掲載の、谷口俊哉「モモとの約束」犬はいいつも奇跡を運ぶ」は、二六〇枚超の、今回読んだなかでいちばんの長篇エンターテイメント。

神戸に住む「僕」は、トイブードルの愛犬モモが死んでしまつて、呆然自失の状態。父親は幼いころに、母親もモモと出会う一年まえに亡くなり、六年間をモモとだけ過ごしてきたという設定である。あるとき、そのモモ

が夢のなかでか、自分の産んだ子どもたちの様子を見てきて欲しいと「僕」に訴える。そこから「僕」の旅がはじまる。

モモは四匹の子犬を産んでいた。一匹は交配した相手の犬のところにいるはずだが、残りの三匹はほとんどあてがない。わずかの手がかりから「僕」は、横浜、那覇、名古屋へと出かけて、モモの子どもの痕跡を粘り強く追う。そして、その旅先で「僕」はさまざま

なひとと出会う。那覇で出会った三島真美という若い女性の存在がいちばん大きいのが、名古屋で出会う引きこもりがちの中学生の奥西大洋、懐いていた犬を思案の末に飼い主に戻すホームレスの男、また、「僕」が餌やりのアルバイトをする、一見獐猛なドーベルマン犬の飼い主の、これまたおっかなげな社長など、印象的な人物とエピソードがつつぎとぎと現われて、二六〇枚超はあつという間である。

『ココトコ』第4号はこれまでと較べると若干おとなしめだが、相変わらず達者な作品がならんでいる。

同誌巻頭に掲載の、黒住純「ここではなく、今日でもなく」では、「わたし」はある日、不意に見かけた河童を追いかけて、不思議な森に迷い込む。その森のなかで「わたし」はずっぱだかになって、自分の靴下やパンツを追いかける羽目になる。その森では衣服までも

意志を持つようになって、「わたし」に着られることを嫌って刃向かうようなのだ。そこで「わたし」は思わぬことに、職場でうだつのあがらない「田原課長」と出くわす。河童の親分と真剣勝負の将棋をしたあと、「わたし」は田原を残して森から逃げてゆく……

会社の疎外された人間関係を映した短篇と言えはそれまでだが、三五枚あまりの作品で作者が寓意に徹しているところがこの作品のよさだと思ふ。

同誌掲載の、青木和「雪割り月」(約四五枚)は、同誌第2号から続く連作の三作目。

中心人物の塩採り、影を扱う能力をもった「影人」の少年テロ、テロの幼い妹のような位置にあるアカザという魅力的な女性が登場する。荒れに荒れている砂の大河の前に足止めされた塩採り、テロ、アカザの泊まっている宿屋で、「ジャドウ」という楽器で弾き語りをしていく女性、それがマグダである。彼女の歌には宿屋の客たちの荒んだころを慰める力が備わっているのだった。

マグダはまた、「タワン」と呼ばれる植物の根を宿屋の主人に煮込ませたりしているのだが、それは毒にもなれば睡眠剤にもなる薬草である。アカザはマグダに亡き母を、マグダはアカザに亡くした娘を見て、たがいに惹かれ合う。とうとうその宿にアカザを残して、

塩埭りとテロは砂の大河を渡ってゆく……。

連載はまだまだ続きそうだ。いったいこれから話はどう展開してゆくのだろうか。

同誌掲載の、筒井透子「空へ」は六五枚あまりの瑞々しい作品。

主人公の中崎士郎は、機械音でボーカルを出させるボーカロイドというソフトを用いる作曲家。一年前、中学生の娘がいじめから自殺してしまい、以来、妻とは別居状態にある。そこに半年振りに妻がやって来る。中崎の一曲「空へ」が妻にとっては亡くなった娘のためすばらしい曲に思えたからだ。

ただし、ボーカロイドによる歌にもかかわらず、そこには「セナ」という声の「ライブラリ」が用いられている。その「セナ」は実際の人間の声から作られていて、その限りなく透明な高音の声が「空へ」という曲の大事なポイントになっている。その「セナ」の声の持ち主をもとめて中崎と妻は車で出かける……。

私自身はボーカロイドというソフトとセナという声の「ライブラリ」の関係がほんとうのところはよく分からないのだが、「空へ」という一つの楽曲が、中崎とその妻、さらには「セラ」の音源となっている元ジャズシンガーの女性とその夫らにかけがえのない救いをもたらす構成となっているところに、清々しい魅力を感じた。

「組香」第8号掲載の、鵜川澄弘「KJK S」は、「個人情報」とその「流失」という事態に翻弄されている社会を風刺した五〇枚弱の作品。

冒頭から主人公の「俺」は自分が不在になつている場面に繰り返し遭遇する。選択定年で辞めた会社ではもはや自分の名前も通じない。卒業した小学校から自分の痕跡がすっかりかき消されている。図書館では免許証の有効期限が切れていて、図書館では免許証の有効期限が切れていて、図書カードを作ってもらえない。行き着けの居酒屋で初めての客のような扱いを受ける……。

そういう不条理な場面が続いた後、それがある会社が制作した「ヴァーチャル体験ツアー」の場面であることが明かされる。四〇名ほどの参加者のための説明会で提示されたビデオであったのだ。会社の名はKJKS、「個人情報完全消去」のアルファベットの頭文字をとったものだという。

ヴァーチャル体験の自身自体とうてい居心地のいいものとは言えない上、その会社が参加者に対して最終的に目論んでいるのは、長野県にある、閉ざされた高級マンションへの入居である。これは「個人情報」をめぐる一種のデイストピア小説であつて、私たちは所詮「個人情報」を晒しながら生きるしかないということになるだろう。

同誌掲載の、中野雅丈「いつか私が、彼ら

に初めに伝えるべき言葉を見出したならば」は、百枚近くに達する力作。

「私」は妻を亡くして六六歳のひとり暮らし。定年退職後、自宅の近くのダム湖の巡回ボランティアを遊佐という名前の友人と続けている。そこは自殺の名所となつていて、実際、「私」と遊佐はすでに九人の自殺志願者を思いとどまらせた実績があつた。

その日は幼い娘を連れた三〇歳ぐらいの女性がダムの手すりに手をかけているのに出くわす。「私」は巧みに話しかけ、二万円のお金まで渡し、女性に自殺を思いとどまらせることに成功する。しかし、翌日、そのダム湖で母と娘の無理心中死体と思われるものが発見される。「私」が確認してみるとまさしく前日に話しかけた母と娘だった。いったい自殺を思いとどまったと見えた女性がなぜあらためて無理心中にいたったのか。自分の言葉はまったく無力だったのか。ここから作品は推理小説的な展開になる。

「私」と言葉を交わし、いったん旅館に戻つたあと、その女性は滞っていた携帯電話の料金をコンビニで支払い、携帯を使用可能にしたうえで、別の人物に電話をしていた。その相手がふたたび彼女が心中にいたつた鍵を握っているのではないか。

そういう推理に「私」を向かわせたのは、「私」が続けている小学生の作文の添削をき

っかけとしてだった。相手と信頼関係を作るうえで、約束を守り続けることが大事だと指摘した小学生の作文があったのだ。あの女性もそのように約束を守ろうとして、それが果たせず、あらためて心中に向かったのではないかと、「私」は考えたのだ。

彼女が最後に携帯で話した相手とも「私」は直接言葉を交わし、いったん心中を思いどまりながらふたたび彼女が心中にいたった経緯を推測してその相手に語る。相手は凶星を突かれたことをほぼ認めるが、それでもその母親と娘が亡くなったことは取り戻しようもない。

さらに、そういつたいきさつを遊佐に「私」が話しながら、ヒントになった小学生の作文を見せたところ、遊佐がその作文のなかに「だれかたスケてわたしを」というメッセージが暗号のように書き込まれていることを発見する。「私」はただちにその小学生のもとへ旅立つ…。

最初に、夏川龍一郎「龍の舞う村」を今回読んだなかで優れた筆頭の作品と紹介したが、あえて二番目をあげればこの作品となるだろう。

『AMAZON』第521号掲載の、蛭川崇「鳥の眼」は、四〇枚強の作品。

若い夫婦が暮す家のベランダにやって来た「シロハラインコ」を夫が積極的に飼いつつ

し、もう大丈夫とばかりその鳥を屋外で放つたところ逃げられてしまふ、というただそれだけの話だが、蛭川作品には独特の癖がある。とても明晰な文章で書かれたこの作品でも、インコを飼いつつ夫は、「由香里」という名の女性と不倫関係にあつて、現にその小鳥を飼いつつ不倫関係に、妻が不在のあいだに彼女がやって来たりもしている、という設定なのである。夫と妻の関係はどうなっているのか、そこで小鳥と由香里はどういう位置を占めているのか、さらにタイトルの「鳥の眼」とはなにか、読者は際限のない問いに追いやられる。

『青の時代』第50集巻頭に掲載の、熊谷郁子「海の色」は、ひとり息子の結婚の話から過去を甦らせる女性をめぐる、四〇枚あまりの作品。

美矢子のもとに、香港の商社に勤務している息子の星矢から電話が掛かり、大山マサミという女性と結婚すると伝えられる。七歳年上で、すでに妊娠三カ月という。美矢子には不満なのだが、マサミから届いた誕生日プレゼントは彼女を喜ばせるものだった。しかし、その後に掛かってきた大山マサミの母親からの電話で、「私、谷口雅和の元家内です」と美矢子は告げられる。谷口は三〇年前に美矢子が不倫をしていた相手で、星矢はその谷口の子どもだった。美矢子はシングルマザーとし

て星矢を育てたのだった。大山マサミの母親はその後谷口と別れ、大山姓の男性と結婚したが、マサミは大山の前妻の娘だということ。

こういう背景が星矢とマサミのその後にどういう影響をおよぼすかは開かれたままだが、美矢子は星矢が自分の子どもであることは確かだと思ひなおす。

『野火』第39号掲載の、神尾与志広「ドクツプアウト」は、長いあいだ引きこもりを続けて来た男性が次第に社会に出てゆく五〇枚弱の物語。

「僕」は大学へ進学したのち、公務員試験にことごとく失敗し、以来、引きこもりの生活を続けて二五年になる。母は亡くなり、父との二人の暮らしたが、公務員を勧めた父はそのことに罪責感をおぼえていて、「僕」に強くあたれない。「僕」のほうで父親に「煙草を買って来い！」とどなる日々である。

そんなとき「僕」は夜のコンビニで自分より「干支の一回りは若く見える女性」を見かける。「僕」は自分と同じ孤独の影を感じ、彼女を見るためにコンビニに出かけるようになる。やがて彼女と言葉を交わした「僕」は、父ともすこしずつコミュニケーションを回復してゆき、彼女と連絡し合うためにスマホを父に買ってもらうたりする。

けつして器用とは言えないが、長い静かな時間を背後にもつ物語だ。